

11.5	第8回 読響アンサンブル・シリーズ よみうり大手町ホール／19時30分開演(19時から解説) The 8th Yomikyo Ensemble Series Thursday, 5th November, 19:30 (Pre-concert talks from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall
------	--

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《菊池洋子×読響の室内楽》

ピアノ／菊池洋子 Piano YOKO KIKUCHI

フルート／一戸 敦 (読響首席フルート奏者) Flute ATSUSHI ICHINOHE

オーボエ／蠣崎耕三 (読響首席オーボエ奏者) Oboe KOUZOU KAKIZAKI

クラリネット／金子 平 (読響首席クラリネット奏者) Clarinet TAIRA KANEKO

ファゴット／井上俊次 (読響首席ファゴット奏者) Bassoon TOSHITSUGU INOUE

ホルン／松坂 隼 (読響首席代行ホルン奏者) Horn SHUN MATSUZAKA

ナビゲーター／鈴木美潮 (読売新聞東京本社メディア局編集委員)
Navigator MISHIO SUZUKI

モーツァルト 歌劇《魔笛》序曲 (木管五重奏版) [約7分]
MOZART / “Die Zauberflöte” Overture (wind quintet version)

モーツァルト ピアノと管楽のための五重奏曲 変ホ長調 K.452 [約24分]
MOZART / Quintet for Piano and Winds in E flat major, K. 452

- I. Largo - Allegro moderato
- II. Larghetto
- III. Allegretto

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン ピアノと管楽のための五重奏曲 変ホ長調 作品16 [約25分]
BEETHOVEN / Quintet for Piano and Winds in E flat major, op. 16

- I. Grave - Allegro ma non troppo
- II. Andante cantabile
- III. Rondo. Allegro ma non troppo

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

11.20	第19回 読響メトロポリタン・シリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／19時開演 The 19th Yomikyo Metropolitan Series Friday, 20th November, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
11.21	非破壊検査 Presents 読売日本交響楽団 第12回 大阪定期演奏会 ザ・シンフォニーホール／17時開演 The 12th Subscription Concert in Osaka, presented by Non-Destructive Inspection CO., Ltd Saturday, 21st November, 17:00 / The Symphony Hall

指揮／オスモ・ヴァンスカ Conductor OSMO VÄNSKÄ P.6

ピアノ／リーズ・ドゥ・ラ・サール Piano LISE DE LA SALLE P.7

コンサートマスター／日下紗矢子 Concertmaster SAYAKO KUSAKA

シベリウス 交響詩《フィンランディア》 作品26 [約8分] P.8
SIBELIUS / Finlandia, op. 26

ラフマニノフ ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18 [約33分] P.9
RACHMANINOFF / Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18

- I. Moderato
- II. Adagio sostenuto
- III. Allegro scherzando

[休憩 Intermission]

シベリウス 交響曲 第2番 ニ長調 作品43 [約43分] P.10
SIBELIUS / Symphony No. 2 in D major, op. 43

- I. Allegretto
- II. Andante, ma rubato
- III. Vivacissimo
- IV. Finale. Allegro moderato

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[特別協賛] 非破壊検査株式会社 (11/21)

[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）(11/20)

[事業提携] 東京芸術劇場 (11/20)

11.27 [金]	第586回 サントリーホール名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 The 586th Suntory Hall Popular Series Friday, 27th November, 19:00 / Suntory Hall
11.28 [土]	第181回 東京芸術劇場マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 The 181st Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series Saturday, 28th November, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／オスモ・ヴァンスカ Conductor OSMO VÄNSKÄ P.6

ヴァイオリン／エリナ・ヴァハラ Violin ELINA VÄHÄLÄ P.7

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

シベリウス 〈カレリア〉組曲 作品11 [約14分] P.11

SIBELIUS / Karelia Suite, op. 11

- I. 間奏曲
- II. バラード
- III. 行進曲風に

シベリウス ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47 [約31分] P.12

SIBELIUS / Violin Concerto in D minor, op. 47

- I. Allegro moderato
- II. Adagio di molto
- III. Allegro ma non tanto

[休憩 Intermission]

シベリウス 交響曲 第1番 ホ短調 作品39 [約38分] P.13

SIBELIUS / Symphony No. 1 in E minor, op. 39

- I. Andante, ma non troppo - Allegro energico
- II. Andante (ma non troppo lento)
- III. Scherzo. Allegro
- IV. Finale (Quasi una Fantasia). Andante - Allegro molto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
[事業提携] 東京芸術劇場（11/28）

12.4 [金]	第553回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 The 553rd Subscription Concert Friday, 4th December, 19:00 / Suntory Hall
----------	---

指揮／オスモ・ヴァンスカ Conductor OSMO VÄNSKÄ P.6

コンサートマスター／荻原尚子(ゲスト) Guest Concertmaster NAOKO OGIHARA

シベリウス 交響曲 第5番 変ホ長調 作品82 [約30分] P.14

SIBELIUS / Symphony No. 5 in E flat major, op. 82

- I. Tempo molto moderato - Allegro moderato
- II. Andante mosso, quasi allegretto
- III. Allegro molto - Largamente assai

[休憩 Intermission]

シベリウス 交響曲 第6番 ニ短調 作品104 [約28分] P.15

SIBELIUS / Symphony No. 6 in D minor, op. 104

- I. Allegro molto moderato
- II. Allegretto moderato
- III. Poco vivace
- IV. Allegro molto

シベリウス 交響曲 第7番 ハ長調 作品105 [約21分] P.16

SIBELIUS / Symphony No. 7 in C major, op. 105

- Adagio - Un pochetto meno adagio - Vivacissimo - Adagio
- Allegro molto moderato - Allegro moderato - Vivace - Presto
- Adagio - Largamente molto - Affettuoso

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
[協力] アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

オスモ・ヴァンスカ

Osmo Vänskä

フィンランドの名匠
得意のシベリウスで
生誕150周年を飾る

1953年フィンランド生まれ。ヘルシンキ・フィルのクラリネット奏者としてキャリアをスタートさせた後、シベリウス・アカデミーで指揮をヨルマ・パスラに師事した。82年にフランスのブザンソン国際指揮者コンクールで優勝し、一躍注目される存在となった。

88年に母国ラハティ響の首席指揮者に就任し、鮮烈な音楽作りで話題を呼んだ。特にシベリウスの演奏・解釈では高い評価を得て、全交響曲・管弦楽曲の録音を行うなど、ラハティ響とは20年間にわたって良好な関係を築き、現在は桂冠指揮者。93～2002年にアイスランド響の首席指揮者（現首席客演指揮者）を歴任した後、03年からはアメリカ・ミネソタ管の音楽監督を務めており、ベートーヴェンの交響曲全曲録音などで世界的な名声を確立した。またベルリン・フィル、ロンドン響、ロンドン・フ



©Ann Marsden

イル、ベルリン・ドイツ響、オランダ放送フィル、フィンランド放送響など欧米の主要オーケストラを指揮し、近年はシカゴ響、サンフランシスコ響、クリーヴランド管にも客演している。

読響には02年に初登場して以来、たびたび客演している。北欧音楽を中心にレパートリーを広げ、ファンも多い。今回は3年ぶりの登場。シベリウスの交響曲第1、6、7番は初披露となる。

- ◇11月20日 読響メトロポリタン・シリーズ
- ◇11月21日 大阪定期演奏会
- ◇11月27日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇11月28日 東京芸術劇場マチネーシリーズ
- ◇12月4日 定期演奏会



©Lynn Goldsmith

ピアノ リーズ・ドゥ・ラ・サール

Piano Lise de la Salle

フランス・シェルブール生まれ。パリ国立高等音楽院で学び、ヨーロッパ各地のコンクールで優秀な成績を収め、10代半ばにして注目される存在となった。

これまでオーケストラではドレスデン国立歌劇場管、ミュンヘン・フィル、ベルリン放送響、フィルハーモニア管、シカゴ響、ボストン響、ロサンゼルス・フィルなどと、また指揮者ではルイジ、マゼール、ヤノフスキ、ビシュコフ、ヴァンスカらと共演している。CDではフランスのナイーヴからショパン、シューマン、ラヴェルなどを出している。

読響とは今回が初共演。

- ◇11月20日 読響メトロポリタン・シリーズ
- ◇11月21日 大阪定期演奏会



©Laura Riihelä

ヴァイオリン エリナ・ヴァハラ

Violin Elina Vähälä

アメリカ生まれ。フィンランドで育ち、12歳でラハティ響と共演してオーケストラ・デビューを飾った。ヴァンスカに才能を見出され、今までにヘルシンキ・フィル、フィンランド放送響、ミネソタ管などと共演している。指揮者ではセゲルスタム、スラットキン、サラステ、フルシャらと共演し、欧米各地でツアーを行っている。室内楽ではバシュメット、チュマチェンコ、ギトリスらと共演。今シーズン、フィンランド放送響の定期公演でもシベリウスのヴァイオリン協奏曲のソロを弾く。

読響とは今回が初共演。

- ◇11月27日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇11月28日 東京芸術劇場マチネーシリーズ

11.20 [金]

11.21 [土]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

シベリウス 交響詩〈フィンランディア〉 作品26

作曲：1899年／初演：1900年7月2日、ヘルシンキ／演奏時間：約8分

原曲は新聞弾圧への抗議劇

フィンランドの作曲家、ジャン・シベリウス (1865～1957) は、民族叙事詩のカレワラを題材とした作品を数多く作曲し、フィンランドの国民音楽に大きな足跡を残した。

当時、ロシアの支配下にあったフィンランドでは、民族運動が高まりを見せていた。そのことに神経をとがらせていたロシアは、フィンランドの新聞に圧力を加えてゆく。1899年、シベリウスはこの新聞弾圧に抗議を込めた劇の音楽を作曲。その終曲が、交響詩〈フィンランディア〉の原曲である。

交響詩〈フィンランディア〉では、シベリウスは特定の描写や民謡などを用いていないが、フィンランドの自然、とりわけ彼が愛したカレリア地方の自然

が想起される。果てしなく続く森林は、シベリウスの創作の原点である。この曲は、フィンランドの国民運動の象徴的な意味を担うとともに、フィンランドの人々に民族の誇りと自信をもたらし、自国の文化と伝統の尊さを実感させた。

音楽は、序奏＋主部という構成。重々しい序奏は、当時のフィンランドの苦渋に満ちた雰囲気を描いているように思える。主部に入ると、低音の長い保続音が現れる。これは、シベリウスの作品でよく用いられる手法で、大地の普遍性や自然の力強さをイメージさせる。音楽は徐々にクライマックスを形成していき、フィンランドの栄光を表すように、高らかに結ばれる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (シンバル、大太鼓、トライアングル)、弦五部

ラフマニノフ ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

作曲：1900～01年／初演：1901年11月9日、モスクワ／演奏時間：約33分

重い叙情性を存分に発揮

セルゲイ・ラフマニノフ (1873～1943) は、ピアノに囲まれた環境に育った。彼の祖父は軍人でありながら、作曲家ジョン・フィールドにピアノを習う。親戚には名ピアニスト、アレクサンドル・ジローティもいる。ラフマニノフもモスクワ音楽院でピアノや作曲などを学び、ピアノについてはスクリャーピンを^しの^あいで首席で卒業した。

しかし、交響曲第1番の初演が不評に終わり、ラフマニノフは精神的なスランプに陥ってしまった。1899年ごろにピアノ協奏曲第2番の創作に着手してまもなく、神経衰弱の症状が悪化し、ニコライ・ダール博士の催眠療法を受ける。病を克服した彼は、1901年にこのピアノ協奏曲を完成させ、ダール博士に捧げた。曲中にも、ダール博士がヴィオラを愛好していたことを意識し、ヴィオラ・パートに比重を置くなど、博士への感謝の念が示されている。

ラフマニノフは4曲のピアノ協奏曲を完成させた。彼がピアノ協奏曲を創作する際に最も手本としたのは、おそらくチャイコフスキーであろう。チャイコフ

スキーの音楽には、ロシアの国民音楽のエッセンスが西洋の洗練された響きの中に見事に融け込んでいる。ただし、チャイコフスキーとは異なり、ラフマニノフの音楽の特質は重い情感にある。

ピアノ協奏曲第2番においても、ラフマニノフ特有の重厚な低音をはじめ、教会の鐘の音の表現など、多彩な音色と洗練されたリリシズムに^{あふ}満ち溢れている。そして、重い叙情性を存分に発揮するオーケストラの響きは、ピアノ・パートの低音と絶妙に融合し、大河を思わせるダイナミズムを生み出している。

1901年の初演時の指揮はジローティ、ピアノ・パートをラフマニノフ自身が演奏した。

第1楽章 鐘の音をイメージさせる重厚な和音に続き、クラリネットと弦楽器が第1主題を重々しく奏でる。

第2楽章 冒頭の神秘的なアルペジオは、ラフマニノフが1901年に作曲した〈ロマンス〉からの引用である。

第3楽章 変奏曲の手法を取り入れた自由なロンドの形式で書かれている。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル)、弦五部、独奏ピアノ

シベリウス 交響曲 第2番 ニ長調 作品43

作曲：1900～01年／初演：1902年3月8日、ヘルシンキ／演奏時間：約43分

熱い想いがユニークな響きに

シベリウスは当時の作曲家としては長命であったが、60代半ば以降は大きな作品を発表していない。交響曲を7曲書き上げているが、第1番を1899年に作曲したのを手始めに、1924年までの25年間でそのすべてを完成させた。

交響曲第2番は、シベリウスの交響曲の中でも、最もよく演奏される。この作品は交響曲第1番の完成後に作曲が始められたが、創作の筆が進んだのは1901年の前半、つまりイタリアのラパッロ滞在中であった。その後、徹底的な推敲^{すいこう}をへて年末に完成。翌年の初演では、シベリウスが指揮台に立った。

交響曲第2番には、シベリウスの個性が鮮やかに示されている。低音の長い保続音やほの暗い響きが用いられ、内面の熱い想いに満ち溢^{あふ}れた作品である。また、オーケストレーションも独特である。さまざまな楽器の音色を融合させるよりも、楽器群の対立や掛け合いを取り入れることにより、彼はユニークなオーケストラの響きを創り出した。そして、第1楽章のほの暗い薄

明のような楽想に始まり、第4楽章のエネルギー^{がいか}な凱歌で締めくくる構成は、ベートーヴェンの交響曲〈第九〉をイメージさせる。

第1楽章 序奏では、弦楽器によって和音のモチーフが示される。ニ長調の明朗さよりもほの暗い印象が感じられ、この楽章の雰囲気^{がいか}を象徴しているかのようである。しっかりとした形式感を備えたソナタ形式。

第2楽章 この楽章の楽器編成は、音色の融合よりも音色の対比を強調しており、シベリウス独特の感性が発揮されている。

第3楽章 快活なスケルツォ。主題は同音連打のモチーフで始まるが、これは第1楽章の冒頭のモチーフと結びついている。

第4楽章 ソナタ形式。音楽は第3楽章から切れ目なく演奏される。弦楽器が奏でる第1主題の前半のモチーフは、シンプルながらも強い感動を与える。音楽は楽器を重ねながら徐々に高揚し、壮大に締めくくられる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

11.27 [金]

11.28 [土]

奥田佳道 (おくだ よしみち)・音楽評論家

シベリウス 〈カレリア〉組曲 作品11

作曲：1893年／初演：1893年11月13日、ヘルシンキ／演奏時間：約14分

独立運動の聖地にこめた愛国の情

今年、生誕150周年を迎えたフィンランドの偉人ジャン・シベリウス(1865～1957)の人気曲が開演を彩る。

フィンランドの伝承叙事詩カレワラに基づく音楽絵巻〈クツレルヴォ〉を1892年春にみずからのタクトで初演したシベリウスは、名門の令嬢アイノ・ヤルネフェルトと結婚し、新婚旅行を兼ねて同国南東部の湖水地方カレリアを旅する。ロシアとの国境に広がるカレリア地方は、前述の民族叙事詩カレワラ発祥の地で、フィンランド人の心の故郷だった。と同時に、ロシアの圧政に苦しんでいた当時のフィンランド人にとって、カレリアは独立運動の気運を高める「聖地」でもあった。

かの地域の民謡を採譜し、伝統的な舞曲や謡^{うた}を楽しんだシベリウスに、翌1893年、作曲の依頼が舞い込む。依頼主はヘルシンキ大学の学生団体だ

った。同国東部の小さな街で国境も近いヴィープリ(現ロシア領ヴィボルグ)出身の学生たちから、カレリア地方の歴史を描く野外劇に付随音楽を作曲してほしいとのことだった。

愛国の情に燃えていた20代後半のシベリウスは、もちろん快諾。かくして序曲と劇付随音楽が書かれる。シベリウスはヘルシンキでの野外劇上演の数日後、数曲を編み直し、序曲を交えてコンサートで披露。そこからさらに3曲を厳選した。

組曲〈カレリア〉はこうして出来上がった。管弦打楽器^{めいせき}の明晰な筆致に思わず微笑む。“間奏曲”の遠近法、マーチの効果も鮮やか。“バラード”では、シベリウスをシベリウスたらしめる楽器のひとつ、イングリッシュ・ホルンも響く。

第1曲 間奏曲 **第2曲** バラード
第3曲 行進曲風に

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タン布林、大太鼓、シンバル、トライアングル)、弦五部

シベリウス ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47

作曲：1902～03年、1905年／初演：1904年2月8日、ヘルシンキ、改訂・現行版初演：1905年10月19日、ベルリン／演奏時間：約31分

名コンマスを想定した難技巧

清らかな響きと烈しい情趣を併せ持つ傑作だ。独奏に寄り添うかと思えば、時に対峙するオーケストラの狂詩曲的な創りも魅力となる。第2楽章は夢幻の境地。第3楽章を、作曲者は「死の舞踏」と呼んだ。コントラストも鮮やかだ。

若き日のシベリウスはヴァイオリニスト志望だった。カール・ゴルトマルクとローベルト・フックスのもとで作曲法を学んでいたウィーン留学時代には、ウィーン宮廷歌劇場管弦楽団のオーディションも受けたという。

そんな作曲家がヴァイオリン協奏曲を書くのは、芸術的な必然と言える。1903年、シベリウスはヘルシンキ市立管弦楽団（ヘルシンキ・フィル）の名コンサートマスターだったウィリー・ブルメスターの妙技を想定し、創作にいそしむ。ブルメスターも協力を惜しなかった。しかし1904年3月と決まった初演の日取りは、シベリウスの個人的な都合で前倒しされる。

同年2月の初演で弾いたのはシベリウス音楽院教授のヴィクトール・ノヴ

ァチェックなる人物。演奏に相当問題があったようだが、それ以上に凝り過ぎた第1楽章、同楽章に挿入された二つのカデンツァ、難技巧を要する第3楽章に批判が集中した。褒められたのは第2楽章だけだった。

それでシベリウスは両端楽章を短縮しつつ、大規模な改訂を施す。カデンツァは一か所に、終楽章冒頭の舞曲風楽想にはティンパニを添えた。

改訂稿の初披露は、ベルリン国立歌劇場管弦楽団のコンサートマスター、カレル・ハ ril に委ねられ、リヒャルト・シュトラウスが指揮した。名手ブルメスターはかなり気を悪くしたと伝えられる。

ちなみに2014年、この協奏曲の原石とも言える初期ヴァージョンが刊行され、話題となった。今日の演奏は改訂稿つまり現行版による。

第1楽章 アレグロ・モデラート ニ短調 **第2楽章** アダージョ・ディ・モルト 変ロ長調 **第3楽章** アレグロ・マ・ノン・タント ニ長調

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

シベリウス 交響曲 第1番 ホ短調 作品39

作曲：1899年、1900年改訂／初演：1899年4月26日、ヘルシンキ／演奏時間：約38分

凛とした空気感と豪胆さの魅力

ヘルシンキで初演され、1900年のパリ万博でも披露されたシベリウス最初の交響曲は、表情豊かに、と記されたクラリネットのソロと、大地の胎動を表すかのようなティンパニのトレモロで始まる。いずれもこの作曲家の芸風を際立たせる楽器だ。

長調・短調の世界と、そのどちらでもない教会旋法を行き来し、自然と交歓したかと思えば、激情をも顕わにしたシベリウス。凛とした空気感と豪胆さを併せ持つ交響曲第1番は、初演以来喝采を博してきた佳品である。

フィンランド語独特の「はねる」発音と呼応する付点のリズム、多用されるシンコペーションに、くっきりと打ち込まれるアクセント。それに、西欧のロマン派的な構造概念とは一線を画す、フレーズの大胆な句読点も聴き手を捉えて離さない。ピッツィカートの効果も抜群だ。幻想風の楽想に欠かさないハーブの音色もまた。

古き良き時代のフィンランド人が好んだ言葉 sisu（シス）—— 不屈の魂、

忍耐強さの美学も見え隠れする。

シベリウスは、それまでに交響詩、劇音楽で成功を収めていた。30代半ばを迎えようかという、気持ち遅咲きの交響曲「作家」は、チャイコフスキーの〈悲愴〉（1893年初演、翌年以降ヘルシンキでも演奏）から有形無形の影響を受けたとされる。留学時代のウィーンで体感したワーグナーとブルックナーの調べも、どこかでこだましたかもしれない。

しかし、シベリウスはシベリウス。その独自の音楽語法は、内に外に烈しい交響曲第1番で明らかにされている。当時の母国が置かれた状況と、孤高の道を歩み始めた音楽家の決意表明も聴こえてくる。

第1楽章 アンダンテ、マ・ノン・トロppo～アレグロ・エネルジーコ

第2楽章 アンダンテ（マ・ノン・トロppo・レント）

第3楽章 スケルツォ、アレグロ

第4楽章 フィナーレ（クアジ・ウナ・ファンタジア 幻想曲風に） アンダンテとアレグロ部が交替

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、大太鼓、トライアングル）、ハーブ、弦五部

シベリウス
交響曲 第5番 変ホ長調 作品82作曲：1914～15年、1916、1919年（完成稿）／初稿初演：1915年12月8日、ヘルシンキ／
完成稿初演：1919年11月24日、ヘルシンキ／演奏時間：約30分

終楽章に白鳥の舞いが見える

ちょうど100年前の1915年の暮れ、ジャン・シベリウス（1865～1957）の50歳の誕生日を祝うコンサートで4楽章の交響曲として初演され、後に三つの楽章に改訂された劇的な交響曲である。

第一次世界大戦に代表される不穏な国際情勢も影響し、大曲から遠ざかっていた当時のシベリウスだったが、1914年、アメリカのノーフォーク音楽祭で交響詩〈大洋の女神〉作品73をみずから初演。喝采を博し自信を取り戻したのか、シベリウスは50歳の祝賀行事に向けた新たな芸術創造に意欲を見せていたのだった。

1915年春、シベリウスは日記に次のように記している。「神さまが、天国の床のモザイクの一片を投げてくれた。これを元通りにして（曲を創って）みなさい」「16羽の白鳥を見た。人生最高の出来事。白鳥は上空を旋回し、きらめくシルバーのリボンのように太陽の彼方へと飛んでいき、その姿は消えた……」。終楽章で繰り返されるホルンの跳躍的な響

きや木管の調べに、白鳥の舞いが見え隠れする。あのホルンのフレーズを、白鳥の讃歌と呼ぶフィンランド人指揮者もいる。

4楽章の交響曲としてヘルシンキ大学の祝祭ホールで初演され、その形で広まるかには見えなかったが、シベリウスは出来映えに満足できなかったようで、改訂に着手する。初稿、すなわち1915年に初演した際の第1楽章と第2楽章を一つの楽章に編み直し、1916年暮れにトゥルクなどで披露、1919年によりやく現行の形となった。4楽章版から現行3楽章版への移行に際し、木管、金管楽器の筆致はより有機的に、いっぽうトータルの小節数は大きく減っている。

休符を大胆に交えた、驚愕（きょうがく）のエンディングも現行版の特徴である。

第1楽章 テンポ・モルト・モデラート～アレグロ・モデラート **第2楽章** アンダンテ・モッソ、クワジ・アレグレット **第3楽章** アレグロ・モルト～ラルガメンテ・アッサイ

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、ハープ、弦五部

シベリウス
交響曲 第6番 ニ短調 作品104

作曲：1915年～1923年（着想時期含む）／初演：1923年2月19日、ヘルシンキ／演奏時間：約28分

神秘的な響きの中に祈りも

レ^{デー}（D＝ニ音）の響きを大切にした神秘的な交響曲。「白鳥讃歌」や響きの屹立性（きつりつ）が際立つ交響曲第5番とは、大きく趣が異なる。ハ長調／ハ音への摩訶不思議な「浮遊」を続ける交響曲第7番とも、異なる世界が広がる。そもそも、シベリウスの交響曲全7曲に同型の音楽は、ない。

便宜的にニ短調と記される。実際レの音で始まり、レの音とともに消えゆく作品だが、作曲者は八つの教会旋法の一つであるドリア調を採用した。シ^{ハー}（H＝ロ音）のフラットもド^{ツェー}（C＝ハ音）のシャープもない“ニ短調”。端的に言えば、bも＃も付けずにレからピアノの白鍵だけで上がってゆく音階で創られている。ゆえに（ニ短調）という括弧付きの表記が望ましい。北欧フィンランドの民俗音楽、それにシベリウス芸術のいくつかは、長調・短調とは異なる旋法的な筆致をもつ。

交響曲第6番では、響きの環（わ）や永遠性が魅力で、祈りの情趣も美質となる。シベリウスは1922年の夏、最愛の弟クリ

スチャンを亡くしている。いっぽう、第1楽章の中盤や第3、第4楽章には、無邪気にも映る管弦の疾走も添えられた。

弦楽の細分化がもたらす清らかな響きばかりでなく、第1楽章の終盤や第2楽章の冒頭で存在感を示すティンパニ、ここぞという場面の背景（いろど）を彩るティンパニのトレモロも演奏の鍵を握る。教会旋法に基づく木管、金管の舞曲風のフレーズ、それに——いつものように——3本のトランペットもシベリウス独特のハーモニー形成に欠かせない。さらにこの交響曲では、新たなテンポやフレーズを導くハープが重要な存在で、指揮者によってはこの楽器をステージ中央に置く人も。

最終楽章の舞いや駆け抜けるドラマも胸を打つ。しかし、曲はレとともに消えゆく。終わりはフェルマータのついた休符である。

第1楽章 アレグロ・モルト・モデラート
第2楽章 アレグレット・モデラート
第3楽章 ポコ・ヴィヴァーチェ
第4楽章 アレグロ・モルト

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、ハープ、弦五部

シベリウス 交響曲 第7番 ハ長調 作品105

作曲：1924年／初演：1924年3月24日、ヘルシンキ／演奏時間：約21分

詩的かつ壮麗な幻想曲

2分の3拍子。ティンパニのソ（^{ゲー}＝ト音）の音に導かれ、チェロが、コントラバスが崇高な音階を奏でる。エコーのように呼び交わされる楽の音。例によって、ティンパニのトレモロに管弦の息の長い調べが聴き手を捉えて離さない。ハ長調の澄んだ響きを匂わせながら、ハーモニーは自在に変幻し、幻想の森へと分け入ってゆく。人生や音楽への内なる尽きせぬ想いが、ついに^{あふ}溢れ出る場面も用意された。

もとよりドイツ的な起承転結のドラマは、ない。緩急の対比を交えた楽章構成もない。標題をもたない、詩的かつ壮麗な幻想曲の趣。実際、この作品は交響的幻想曲（シンフォニア・ファンタジカ）第1番として1924年3月に初演され、翌年2月の出版時に交響曲第7番となっている。

最後の交響曲。最後と言っても、作曲・初演時、彼は58歳。この後、劇音楽の総決算たる〈嵐〉（テンペスト）作品109、1925年に交響詩〈タピオラ〉作品112を書き、長命のシベリウスは長い沈黙に入る。

交響曲第6番とほぼ同じ1910年代の中葉から後半にかけて着想された。最終的な形は別として、音楽的な素材に関して言えば、実は第6番と第7番には通じる部分も多い。そのため、この2曲をアタッカ的に続けて演奏するフィンランド人指揮者も現れた。

単一楽章だが、テンポはアダージョ、ヴィヴァチッシモ、アダージョ、アレグロ・モルト・モデラート、ヴィヴァーチェ、プレスト、アダージョ、ラルガメンテ・モルトと、思いのほか「動く」。心情吐露だろうか。

頂点に達した名声とは裏腹に、人生、才能に大いに悩み、健康も害していた孤高の巨匠シベリウス。奇跡の交響曲第7番を指揮しつつ、彼はあらゆる不安に怯えていたのだった。酒だけが心を癒した。

トロンボーンが奏でる気宇壮大な主題にご注目を。交響曲第7番の鍵を握る調べで、ここぞという場面で回帰する。ハ長調の属和音（ソ・シ・レ）を経てフォルティッシモでドに達する曲の終結部も聴きどころとなる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部